

奈良高専 図書館だより

No. 14

記事

読書感想文特集号

入選作品(8編)

読書週間展示図書目録

1983年1月 奈良工業高等専門学校 発行

昭和57年度

読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会図書部会
国語科

毎年恒例の、夏休み課題図書の読書感想文コンクールは、今回で7回めになります。国語科と図書館委員会図書部会の教官とで慎重に審査した結果、次に掲げる8名の諸君の作品を、優秀作として選出しました。ここに氏名を紹介して、努力をたたえたいと思います。また、今回からこの優秀作に対して図書券を賞品として贈ることになりました。

- | | | | | | |
|------|------|-------------|-----|------|--------|
| 1 MB | 石原慎一 | (老人と海) | 2 C | 中村 剛 | (さぶ) |
| 1 E | 高森邦彦 | (われら動物みな兄弟) | 2 E | 林 宏一 | (老人と海) |
| 1 C | 吉野真美 | (人間へのはるかな旅) | 3 E | 佃 和吉 | (老人と海) |
| 2 MA | 中嶋 勇 | (法隆寺を支えた木) | 4 E | 村上 隆 | (馬鹿一) |

そのほかに、佳作として選ばれた諸君は次のとおりです。

- | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|-------|-----|-------|
| 1 MA | 下仲篤志 | 1 MA | 宮本秀樹 | 1 MB | 吹原勝司 | 1 E | 平田好充 | 1 C | 中西三奈 |
| 2 MA | 花瀬正邦 | 2 MB | 田中清公 | 2 MB | 山口忠範 | 2 E | 福山進二郎 | 2 C | 山本美智代 |
| 3 MA | 藤丸良介 | 3 MA | 松倉恒夫 | 3 MB | 堀田耕作 | 3 MB | 古橋洋一 | 3 E | 沢野井幸哉 |
| 3 C | 井上充生 | 3 C | 幸田哲和 | 4 MA | 大隅慶明 | 4 E | 後藤雅晴 | 4 C | 坂崎恵子 |

老人と海

1年B組 石原 慎一

感動した。本当に感動した。この作品で、人間の強さ、勇氣、自然の偉大さ、などを学ぶことができた。

この老人を通して、人間とはどういうものかが描かれていると思う。その中で一番感じたことは、人間の強さというものである。年老いた老人が、必死に巨大なカジキマグロに負けまいと四日もの間を闘った姿は感動するばかりである。四日間もの間、老人は孤独であり、武器もなかった。しかし老人はあきらめず、カジキマグロに勝つ方法を考え続けた。けがにもめげず、がんばり続けた。だが老人も一人の人間としての弱さも持っていたと思う。何度も少年がいてくれたらなあと考えた事だ。やはり人間であるから弱い所もあるに決まっている。だがその弱い部分、すなわち、苦しいことをさげよとしたり、甘えよとしたりする気持ちに負けずに打ち勝つ事のできる人間こそ本当に強い人間だといえるのだと思う。僕は老人の人間の本質の強さに感動した。

老人を通して人間の強さを知ることができた。またこれと同時に自然の偉大さをも感じられた。老人は強い人間だ。だが自然にはかなわなかった。カジキマグロには勝つことができたにせよ、結局はサメに食べられてしまった。僕は本当にサメが憎たらしかった。いい加減に老人を苦しめるのをやめろ、と言いたかった。そして作者を残酷だと思った。だが作者が残酷なのではなく、自然というものが残酷なのだと感じた。その時に、老人の海に対する考え方を思い出した。老人は海を女性だと言う。本当にそうだろうか？、あなたはこんなひどいめにあっても、海を女性にたとえ、ラ・マルと呼べるのか？、という疑問を老人に聞いてみたい。僕はとてもじゃないが、海を女性にたとえようとは思わない。海は恵みを与えてくれている。しかしそれは、人間が闘ってこそ、その恵みを受け取ることができるのだと思う。だから海を女性とたとえるよりも、男性とした方が僕は良いと思う。しかし、もし僕が漁師になったとしたら、海を女性とたとえるだろう。海が女性だろうが、男性だろうが、強いことには変わりはない。恵みを与えてくれるということも変わらない。それゆえに、自然の偉大さを感じずにはいられない。ただこれだけは、はっきりとしている。

老人の他に忘れてはならない人物がいる。それは少年である。少年は本当にやさしい人間だ。老人が生きているのに張りがあるのも、少年がいるからなのだろう。少年の老人をいたわろうとする心と、老人の少年に迷惑をかけまいとする心は、二人の会話から、ひし

ひしと感じることができる。二人とも、本当に美しい心を持っている。この美しい心も、人間の強さと言えると思う。

この作品の最後の所も印象的である。ひとりの女は大魚の背骨を見て、給仕に尋ねた。給仕は一所懸命に説明するが、女はサメと感違いをする。この場面で人間関係のむなしさというものを感じた。老人の偉大さは、第三者には、わからなかった。というより、わかりっこなかったのだ。人間というのは他人の苦しみや、悲しみを、同じ立場にならねば、本当に知ることができない。これが人間にとって一番悲しいことであり、弱点ではないだろうか。

この作品を読んで良かったと思う。授業では、教えてくれそうもない、人間の強さ、自然の厳粛さを、学ぶことができた。将来、大きな人生の山にぶつかるかもしれないし、くじけそうになるかもしれない。しかし、この老人を思い出せば、きっと立ち直ることができるに違いないと、今は自信を持って言える。

われら動物みな兄弟

1年E組 高 森 邦 彦

この本を読んで僕の自然に対する考え方が少し変わったのです。

どう変わったのかと聞かれると自分でもどう答えたらいいかかわからないが、今までは、自然とは、生物とは、僕にとっては、ただの物質、ありふれた物、あるのは当然の存在物のように思っていました。この本を読んで自然・生物というものが僕たち人間と共にこの地球に住んでいる、人間にとっては欠かせなく大切なもののように思えてきたのです。

また、僕の住んでいる所は、自然とはよくなじめる所だったし、自然の事も少しは理解しているつもりだったのが、この本を読んでいて、少し自信がなくなってきました。

例えば、この本にチョウのサナギについての記録がありました。それは、幼虫がサナギになった時のサナギの保護色のことです。この本を読むまでの僕のサナギの色の考え方は、ただ緑の葉なら緑、茶色い枯枝なら茶色と、光によって決まるのだとばかり思っていました。しかし、この本によると、ある動物学者が光による実験をすると、60パーセントという確率でしか光と同じ色にならなかったそうです。さらに実験をやり、この学者は、サナギの嗅覚がサナギの色を決定する事を見つけたのです。このサナギの色を決める因子は、百年来の懸案の問題だったそうです。どうして今まで、わからなかったかが不思議なくらいでした。

僕も今まで考えていた答えが出たようでなにかとて

も物知りになったような気分でした。

この本には、この他いろいろな動物の特にホルモンについての事が書いてありました。また、これら動物の話と合わせて、人間社会に対する考え方もいくつか書かれてありました。

その中に、

「人間が生命の姿を自由に変え得るまでには、まだまだ時間が要る。自分たちの社会の進歩、いや、自らの心さえ満足にコントロールできないわたしたち人間が、どうして『生命』を自由にできよう。生命の謎をとく難しさに比べれば、地上に平和をもたらす事業は、数千倍易しい仕事なのに、それすらできないのだから。」

と書かれた所がありました。

僕はこの文章を何度も何度もくり返し読みました。現代社会へのこの作者からの訴えであり、また、自然からの訴えのようで、僕の耳からはなれません。

現代人はあまりにも自然に対する考え方があまいようです。空気がよごれているならば空気をきれいにしようとして一人一人が心掛けるべきだと思います。

さもなくば大東京で生き残るのは機械に囲まれた金持ちばかりで、われわれ大衆は死滅するだろう。作者はこう言っています。また、僕もその通りだと思います。空気のきれいな地域に住んでいる人も、空気がもっときれいになるよう心掛けるべきだと思います。

この自然が数億年という長い年月をかけてつくりあげられた芸術品ならば、僕たち人間がこの自然を勝手に破壊し、自分のものにしてしまう権利はないはずだと思うのです。

一人一人の考え方はちがうと思うけれど人類にとって大切なこの自然を守り、人類の宝にしていかなくてはいけないと深く心に思いました。最後にこの大自然というもののすばらしさ、貴さを教えてくれた作者に深く感謝したい。「ありがとう。」と……………。

人間へのはるかな旅

1年C組 吉野真美

1970年代の社会の、あらゆる場所に見られる諸問題のすべての根本は、「秩序なき価値」という状態から起る、と言うカリズマ老人の考え方に、読後の第一印象として、私は、大変、共感を覚えた。

「秩序なき価値」より起る諸問題。これらのどれひとつを取ってみても、容易に解決できるものではない。この物語が、森本哲郎氏によって、書かれてから十年以上たっているが、今でも、それらの問題のいずれも解決したとは言えないようだ。

この物語の中で、作者は、カリズマ氏を通じて、現

代の複雑な状況を、分析している。

第1に、現代人が物事に関して、考えを持たなくなったことだ。つまり主体性がなくなったということである。技術、または科学という、本来なら「物」だけに通用するはずの観念が、「人間」までも支配しはじめたのだ。そして考えなしに、科学を発展させ、その科学的思考により、人間の思考を決めてしまい、考えを持たため現代人という、しっぺ返しを、科学を発達させた人間から、他ならぬ人間が、受けたのである。

第2には、情報過多をあげている。しかも、その情報は、いわゆる計算過程を抜いた算数の答のようなものなのである。

そしてその他の色々な問題すべてが、価値感情の喪失という「秩序なき価値」に、つながっているというのだ。今の時代は、価値の世界を事実の世界に作り変えてしまう、科学的思考が、人間の精神、悩みなどにまで侵入して来、それを意味のない事としてかたづけしてしまっている。そして、なすべき事をしないまま、現在に至っている。ということは、まだ人間は事の重大さを、自覚していないということだろう。さらに、作者の主張する価値観の転換が、いまだになされていないと言えるのである。

また、この中で、現代の「秩序なき価値」を、大学生の思考で、明らかにしている場面がある。探検部に入っている大学生と作者が、社会の問題、主に「生きがい」について議論を闘わすのであるが、作者は、大学生の考え方を、理解できないでいる。「ぼくらに何かすることがありますか。何から何まで、できあがっちゃってるじゃありませんか。」この主体性のない大学生の言葉つまり考え方は、そのまま、カリズマ老人の言う「科学的思考に冒された人間の魂」を表していると思う。しかし、私としては、「生きがい」のない人生という、むなしい考え方に、賛成したくない。目標なしで、生きることは、死んでも同然であると思う。

科学的思考が人間の思考に侵入し、そのもたらした結果は、現代人にとって、残酷だったようだ。そして人間は、この残酷さにも気付かないで生活している。また、この物語を通じて、私が強く感じたこと、それは「科学は、万能ではない」という事実だった。

「…思えば…じつに、はるかな旅でした。」作者は、カリズマ老人に巡り会えた時、言っている。そして、カリズマ老人から得た解答は、「知恵のハシゴを登れ」ということであった。物事、価値の意味を考えながら、答えることのできない問いへの情熱(人間の形而上学的性質)を持つ。それが「知恵のハシゴを登る」ことなのだろうか。

カリズマ老人は言う。「知恵のハシゴを登れ」今、私は、この物語を私なりに理解したことにより、ハシゴを、一段登ったような気分だ。

法隆寺を支えた木

2年A組 中嶋 勇

日本人は、木に対して非常に愛情を持っている。古き良き時代、日本人は、木と共に生活してきた。日本人と木の歴史を、一口で片づけることはできない。機械文明の発達している現在でさえ、木は、金属やプラスチックとは全く異なる、その独特の暖かいはだざわりが好まれ、根強い人気がある。

奈良の、代表的な寺、法隆寺。それを支えてきた千三百年前のヒノキを中心に、なぜ、千三百年間も耐えてこられたのか、法隆寺の修復工事で宮大工を修業した後、法輪寺三重塔の再建、薬師寺金堂の復興、薬師寺西塔復興等の棟梁をつとめた、西岡常一さんと、千葉大学工学部建築学科教授、小原二郎さんが、大工の経験と、科学者の理論との、二つの方向から、謎を解いて行く。

「木は伐られたとき第一の生を終えるが、建物に使われたとき、もう一度、第二の生が始まる。」

という言葉が本文中に出てきた。第一の生は、千年を越すものだが、第二の生も、それに負けず劣らず長いものだ、とのことである。まず、金属材料とは異なる、木材の持つ不思議さに驚いた。私の家は、相当へんぴな所にある。はっきり言って、田舎だ。家の周囲は、木が茂っている。そうした環境に恵まれていてもこんなことは全く知らなかった。しかし、考えてみれば、なるほど、東大寺大仏殿のヒノキの柱は、りっぱにあれだけの重量を支えている。死んでしまえば、できる訳がない。

では、なぜヒノキでなくてはならなかったのか。千三百年たった法隆寺のヒノキの柱と、新しいヒノキとどちらが強いか――。私は新材だと思った。が、答えは「同じ、だった。つまり、ヒノキは、伐られて二～三百年の間に、強度が増し、二割くらい上昇し、それから、ゆるやかに下降して行く。ちょうど、法隆寺の古いヒノキと、新材が、同じ程度の強度にあるということである。ケヤキとヒノキを比べると、新材のときは、ケヤキはヒノキの二倍の強さだが、伐られてから数百年もたたないうちに、ヒノキより弱くなる。つまり、ケヤキは、ヒノキのように千年間も耐えられない。もし、法隆寺がケヤキで造られていれば……。とうてい今の美しさはないであろう。

しかし、私は疑問を感じた。なぜ、建立当初（千三百年も前のことである）の宮大工が、このことを知っていたのか。やはり、今と同じく、長年の経験とカンであるのか。

機械文明のたまものである金属材料。それを自由

に使っている現代人は、ともすれば、木の暖かみを忘れがちである。これから技術者となるべく、努力し、学ぶ私達も、木のやさしさや、暖かさを忘れてるように思える。金属材料の良さも、木材の良さも、ひっそり、学んでいくべきだと思う。

自然が人間に与えてくれる、最高の建築材料は、木である。ヒノキの耐久力は、鉄のそれよりも強いと言われる。千数百年たつて、強度を保っているのは、木造建築か、それとも鉄筋コンクリート建てのビルか。もし、法隆寺建立当初、その横に、鉄筋コンクリートのビルが建てられていたら、現在まで残るのは、やはり、ヒノキの法隆寺だと、私は思う。

さぶ

2年C組 中村 剛

僕は「さぶ」を読んで、我々の友情は本物であろうか、本当に友情と言えるのであろうかという思いに駆られた。それ程この物語は僕に友情の本質を教えてくれた。

さぶはとんまでぐずでいつまでたっても糊仕込みしかできないような少年であり、栄二は男前で器用で気の強い少年であった。彼らは同い年で幼い頃から芳古堂という経師屋に奉公していた。僕はさぶに好感ももった。彼は自分には欠けている愚直なまでに友を思う純真さをもっているからである。栄二は俗にいう万能人だけに何か良からぬことが起こるのではないかという不安を抱いた。やはり僕の不安は現実化してしまった。栄二は無実の罪を着せられて「人足寄場」に送られたのだ。さぶは仕事の暇をみつけては栄二の行方を捜し、大江戸八百八町から栄二の居場所すなわち石川島をつきとめ、五日毎に栄二を訪ねて行った。しかし栄二は、「そんな者は知らねえ」「おらあこの世に知った者なんかいやしねえ栄ちゃんなんて名もおれの名めえじゃあねえ、帰れ」と言って突っ張るばかりだった。しかしさぶは栄二にそんなにまで言われても五日毎に必ずやって来た。なぜそこまでしてやるのだろうか。僕はさぶに無償の友情という理想的な友情を見た。二人とも家庭的に恵まれないというハンデを背負ってはいるが、やはり二人を結び付けるのは、他人には理解できない二人だけの友情であろうと思う。そのことが明らかになったのは栄二が護岸修理中、生き埋めにされた時であった。彼の脳裏には瀕死の時、さぶの泣きじゃくる顔が現れ、「さぶ助けてくれ」「もう勘弁してくれ、おれが悪かった」と二度まで叫んだ。戦争中、特攻隊員が敵艦に体当たりする間際、必ず頭に浮かんで来たのは母の顔だったそうである。人間というのは、今にも死ぬであろうと自分で悟った時、自から

生前、一番苦勞をかけ、愛を与えてくれた人の事を頭に浮かべるものではなからうか。そうすると栄二の場合、それがさぶだったのだ。それもそのはずであろう。栄二は幼い頃、両親や兄弟と死に別かれ本当に孤独な人間だった。だからさぶには兄弟以上の親しみを感じていたに相違ないのだ。その絆は綿文の切れの事なんかで切れはしなかった。しかし、友情は無償の純粹さだけで成り立つものではない。それぞれの人間的成長がなければ自己満足に過ぎない。

間もなく人足寄場を出た栄二は、さぶと店を開き、幼な友達で綿文の女中であったおすえと結婚して、さもハッピーエンドに終わるかと思われた頃、僕の脳裏にすっかり忘れていた綿文の金欄の事を蘇らせるこの小説で最も感動的な場面が現れた。さぶが仕込んだ糊瓶の蓋の裏にさぶの字で「おらがわかった栄ちゃんがあ切のことで島送りになったのは、おらの罪だ、一生かかって、おらはこの罪のつぐないをしなければならぬ。」と書いてあったのだ。まさか、さぶが？僕は一瞬さぶを疑ったがすぐに否定した。さぶは決してそんなことをするはずはないと。しかし栄二は否定しなかった。彼はさぶが人足寄場に五日毎に訪ねて来たのも罪の償いの気持ちからだったと思ひ込む。ああ、危ない。彼らの友情が崩れていくように思われた。人足寄場での栄二の人間的成長を喜んだだけに僕は新たに真の友情の困難さを思い知らされた。しかしその時、栄二のそばでその話を聞いていたおすえが急に泣き出して自分の罪を告白した。それによって友情は危機を脱した。僕は嬉しかった。

さぶと栄二の友情は、今まで真の友をもったことがない僕に友情の本質を教えてくれた。人間の弱さに打ち克ち、人間を鍛えるのは友情だと。僕も心底から話し合え、心の支えとなる友をもちたいと思った。僕以外にも大勢の人が内心ではそのように思っていることだろう。その場合、僕はさぶか栄二か。さぶにあこがれる僕にはさぶの愚直さ、純情さが無い。そうかと言って栄二のような万能人でもない。それゆえに僕は自分自身を飾り立てず、誠実に友と接しなければならぬ。そうすると、いつかはさぶと栄二のように「おめえはな、いつも気持ちを支えてくれる大事な友達なんだ。」と言い合えるだろう。

老人と海

2年E組 林 宏 一

この本を読む前は、「老人と海」という題目から、老人という小さく弱々しいもの、そして、海という广大で荒々しいものという対照的なものを連想させられたが、読み終わってみると、それらはたくましく雄々

しいものという酷似したものとして描かれていたように思う。そして、老人にとっての海は生涯の好敵手と言えるのではないかと思う。

この作品は、キューバの老漁夫サンチャゴと、海という广大でいかめしい自然との勇敢な死闘を描いた物語である。老人サンチャゴはひとりで漁へ出かけて生活を送っていたが、不漁の日がもう八十四日も続いていた。以前は、老人を慕っているマノーリンという少年と一緒に漁へ出ていたが、今は別の舟に乗り込んでいる。老人の四肢や顔などは既に老衰していた。僕は彼の苦勞や年齢を感じた。しかし、彼の目の色だけは海のように青々とした色をたたえ、不屈な生気に満ちていた。それは、孤独に耐え、自分の生きがいによって注ぎ貫くような、そういう強い信念を支えられているような感じを僕は受けた。ある日の夜明け前、老人は遠出をした。やがて、老人は大物を求めて漁にかかった。老人は、少年に去られてひとりになってしまったから、よく大声で独り言を言うようになった。昼頃、一匹のカジキマグロが餌に食らいついてきて、両者の死闘が始まった。死闘の間にも老人は、「あの子がいてくれたらなあ」と大声で独り言を言う。やはり少年のいない寂しさからであろう。この老人の弱々しい一面を見たような気がした。老人は、辛抱強く死闘を繰り広げる。老人は、昔のことを思い出しながら、カジキマグロや鳥に話しかける。途中、飢えや喝き、睡魔に襲われ、また更に、カジキマグロとの格闘で負傷までするが、老人は、それらの苦難に必死で耐え、昼夜の区別なく闘う。カジキマグロが落ちついている間、老人はまどろみ、ライオンの夢をみていた。突然暴れだしたカジキマグロに老人は起こされ、再び死闘が始まり、長期にわたる死闘もいよいよクライマックスを迎える。疲労のため老人は衰弱し、何度も意識を失いかけたが、「しゃんとしろ」と自分自身に言い聞かせ、残っている最後の力をしぼりだし、ついに兄弟分の横腹に鉤を突き立てた。両者の四日間にわたる長い死闘も終わり、老人は勝ち得たものを小舟に縛りつけ、港へ向かった。帰途、血の臭いをかぎつけた鮫に幾度も襲われ、兄弟分の肉をもぎ取られた。老人は、兄弟分にするまいと思ひ、遠出をしすぎたことを悔む。しかし、死闘の果てに兄弟分を殺したことなどちょっと後悔していないに違いないと僕は思う。後悔するどころか、海の男としての誇り、生きがいを感じたに違いない。老人は、残骸と共に港へ戻り、疲労きった体で小屋に帰った。老人はベッドに横になり、ぐっすり眠った。目を覚ますと、何日振りにか少年と言葉を交わした。それは、あのカジキマグロとの死闘のこと、そして、これからのことであった。その日の昼過ぎ、老人は再び眠りに落ち、ライオンの夢をみていた。

本を読み終わってみて、主人公の老漁夫から本当の海の男の強さ、たくましさを教えられたような気がする。そして、一生においてあることを貫き通す信念の

ようなものを感じた。あることとは、好きなことであり、生きがいともいえる。僕も将来は、生きがいとなる職につき、楽しく人生を過ごしたいが、現実には厳しく、はかないものであろう。老人であることを感じさせない勇敢な海の男が、自分自身の理想像の要素をもち、また、僕にとって一種の英雄的な存在であるようにも思われて、とても印象に残っている。その後、老人は、今度は少年と一緒に、広大な海原のどこかで、死闘を繰り広げるに違いない。

老人と海

3年E組 佃 和 吉

この本を読み終わった今、何故か不思議と私の目には、はっきりとこの老人サンチャゴの勇しく戦う姿と大きな海、そして小さな舟が焼き付いている。

私は自然と人間との一体感が、このサンチャゴのような形で存在するとは思ったこともなかった。人間としての限界を尽くして自然と戦いながら、戦うことで自然を愛している。サンチャゴほど自然の神秘を体ごと愛し、自然の厳しさの中でこんなにもたくましく生きている人間は、ほんとうに数少ないのではなからうか。私にはサンチャゴが漁を生きて行くための手段と考えているようには思えない。大魚が彼の鉤に引っかかった時、彼は何よりもそれが強いがゆえに深く愛した。身体の痛みも忘れ、しかし常に冷静で魚の進行方向を長年の経験による勘によって知り、またその魚の海面下深くでの行動をも見極めながら、大魚と自分がお互いひとりぼっちであることを思った。

海の上では老人は確かに1人ぼっちであった。しかし孤独ではなかった。彼には空が、雲が、広い海が、生命の活力を与えてくれる太陽があった。そして愛を感じさせる大魚がいた。その大魚を仕留めるという感じを彼はいっさい与えない。確かに長い死闘ではあったが、それはまるで自然の中に心身とも乗り入れ、大魚を自分のまだ見たことのない神秘的な友と考え戦っているという感じであった。自分に語りかけ、常に自分を励ましながらかつて、その老いた手に感じたことのない強い力に挑んでいった。その時の彼の目は今までにない輝きを見せたであろう。荒々しさの中にも調和のとれた自然の中に生きるものにしかみられない輝きである。「この魚にきつと勝ってみせる。この魚に向かっていけるのは自分だけだ。」という自信と誇りの炎が目に、いや体じゅうに漲っているのが見える。

何があろうと何日かかろうと、自然の強さと威厳を持って人間に服従しないこの魚を必ず引き上げることが、その魚に対する唯一の自分の心を示すものであり、愛だと彼は考えた。それ故に彼は最後まであ

きらめず、大魚を捕えることに命を燃やし、戦いに勝つことができたのである。彼はその大魚の雄姿に榮譽を捧げたであろう。そんな姿が、私の目に映っている。今、彼は傷だらけの手をにぎりしめその魚をそっと見ている。

彼等、老人と大魚は戦いの帰りに、その大魚の匂いを嗅ぎ分けてやってきた鮫に襲撃されてしまった。自分の食料という考えなどを蟻の涙ほども持たず、ただ自分と戦ったすばらしい友としてその大魚を守ろうとして死にもの狂いで鮫に向かって行ったのだった。だが、その甲斐もなく無残にもその大魚の肉という肉をすべて食いちぎられてしまった。これほど辛く悲しいことはなかったであろう。けれども彼は大魚が自由に泳ぎまわって共に鮫と戦う光景を空想し、その悲しみに耐えた。かけがえのない友が死んで、生前の楽しい思い出を追うように。

彼はこの数日の間に今までにない愛を感じとり、全生命力を使い果たした感じで帰って来た。その疲れを癒すかのように深く深く眠った。私は彼をそのままそっとしておいてやりたい。そしてじっと見守っていてやりたい。おそらく彼は、これらの出来事を夢の中で再び経験しているだろう。彼の脳裏からこれらが消えていくことはないにちがいない。また、浜からその老人と大魚の雄姿は消えうせないであろう。荒れ狂った海が静まり返ったような老人の姿が私の目から離れようとしなない。

馬鹿一

4年E組 村上 隆

前回、前々回と読書感想文を書く度に人間の醜い面ばかり見てきた気がするので、今回はひとつ心地好人間讃歌を読みたく思っていた時にこの書に巡り会った。

私がまず惹かれたのは文題の『馬鹿』という言葉である。確かに『馬鹿』というのはほめ言葉ではない。辞書によると、①愚かな事、またその人。②つまらない事。③度を越える事。④効き目がなくなる事、とある。どれを取ってもほめた意味ではない。しかし『おバカさん』という言葉がある。これとて立派な人間を指す言葉ではないが、少なくともけなし言葉ではない。一般に『お目出たい人』という意味がある。そしてその裏に人間らしい『優しさ』が感じられるのである。

そうするとこの『馬鹿』の意味を全部足し合わせると、つまらない事を意味もないのにひたすらに行なう愚かなる善人、となる。この話の主人公、馬鹿一こと下山一(しもやま・はじむ)はまさしくその通りの人間であった。

彼は現状の苦勞に悩まない男であった。常に自分が将来世界一の人間になる事を信じて詩や画を描き続けた。そして道端の草や石を愛し、自然を愛し、運命をも愛した。そんな彼を友人たちは馬鹿一と呼ぶわけだ。だがそれは軽蔑の意でありながら同時に愛称でもあった。それ程彼は憎めない相手なのだ。

そして彼は世界一の仕合わせ者であった。彼の心には人の悪意を感じ取る能力が無かった。それ故、彼のまわりは美しいものでいっぱいだった。彼の眼に映る雑草は、大自然の生命の象徴であり、石は物質の頑固なる存在の象徴であった。そしてこの上ない美であった。彼の悪友たちが彼をからかうためにそれらをお土産だと偽って持ってきた時でも、彼は大喜びしてそれを受け取った。悪友たちは彼を笑ったが、彼が石や草から大自然の美を見出す時、彼の姿は数段立派に見えるのである。そこに、並の馬鹿でない馬鹿一の恐さめいたものがある。

彼の馬鹿は鉄の信念に立脚するものであった。自分が自然から愛されているという信念、自然の美しさに対する信念、自分の詩や画の才能に対する信念、そして将来の成功に対する絶対的な信念である。彼の信じるところが現実のもの、もしくは現実のものとなる保証はどこにも無い。だが誰が彼を笑えるだろう。彼の信じるところが現実のものになり得ないという保証とどこにも無いではないか。そのどちらとも知り難い現実の間に狭まって苦悩するのが凡人であり、自らの信じるところに従って一心不乱に行動するのが馬鹿と天才なのである。

結局彼は馬鹿だったのか、それとも天才だったのか、今の私にはそんな事はもうどうでも良いことなのである。後に『仕合わせな男』の中で、馬鹿一は大器晩成型の画家として認められてくるのであるが、別の見方として『どっちが笑う』のように、将来の幸福を信じながら貧乏のどん底で死んでしまう男と馬鹿一とを重ねて見るのも面白い。前者は天才型の人間、後者は単なる馬鹿な男として描かれたわけであるが、どちらにも共通して言えることは、彼らが本当に自分の人生を

送り得たということである。

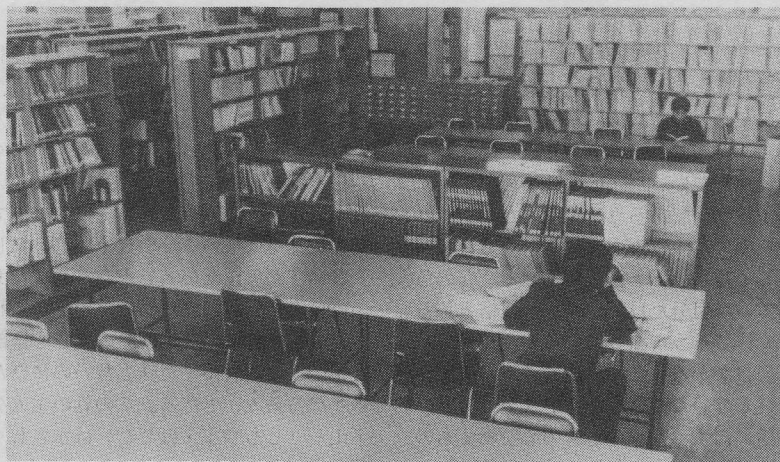
後の世に成功者として名を成せば天才、芽が出ぬままに終われば馬鹿、天才と馬鹿の違いとはその程度のことであろう。重要なのは、彼らが自分の道を信じて疑わなかったという事実である。疑問の余地の無い所に葛藤は生じない。しかるに彼らは、苦悩することも煩悶することも無く仕合わせに生き得たのであった。

このことを考えると、私は自分の人生を振り返らずにはいられない。私は自分を馬鹿だとは思っていない。しかし、物事に執着するでもなく、取り柄とて無い私の人生は、取り越し苦勞やあせり、そして後悔することの繰り返しであったように思われ、あるいは馬鹿一以上の救い難い馬鹿であるようにも思われるのである。

あるいは、世の賢い人間というのは皆、ある意味では馬鹿なのかもしれない。賢人たちは自身を馬鹿だとは思わないであろう。だから他人の馬鹿さ加減ばかりが眼に映る。馬鹿一は自身の馬鹿を認めながらも、まわりの人々がそれ以上の馬鹿に見えろと言った。この時点において馬鹿一の考えは、自分を無知としながら気づいていない無知な人々」と言ったソクラテスの考えとオーバーラップしている。確かにいまだに私たちの知り得ないことがらが数多く存在しているのは事実であり、私たちはそれらを様々な仮定や推測でごまかしているに過ぎない。例えば、私たちは何故生まれたか、人は何故死ぬのか、死ねば人はどうなるのか等、根本的には何もわかってはいない。それは神秘的なベールに包まれた神の領域なのである。例えば人の肉体的な死について科学的考察を示しても、死に対する盲目的な恐怖は変わらないだろう。私たちが精神的にも安らかな死を信じることは、馬鹿一が自分が自然から愛されていることを信じるのと変わらないのである。

あるいは、人が自分と異なる考えの人間を馬鹿と呼ぶのは、自分が馬鹿でないことを信じたが故ではないだろうか。

だとすれば、自分が馬鹿であると悟りつつも、自分を愛し、自然を愛し、運命を愛した馬鹿一こそ本当の意味での賢人なのかもしれない。



〔読書週刊展示図書目録〕

この秋、図書室で展示した「核を考える本」のリストをのせます。この中には関連の図書も参考として入れました。展示が済んだ後も別置してありますので御利用下さい。なお、次号に諸君の「声」をのせる予定です。

「核を考える本」

岩波新書		岩波書店
ヒロシマノート	大江健三郎	
原子核の世界	菊池正士	
核時代を超える	湯川・朝永・坂田編著	
東京大空襲	早乙女勝元	
死の灰と闘う科学者	三宅泰雄	
ひとり暮らしの戦後史	塩沢美代子、島田とみ子	
原子力発電	武谷三男編	
ぼくの町に原子力船がきた	中村亮嗣	
原爆に夫を奪われて	神田三亀男編	
現代の核兵器	高榎 堯	
岩波ジュニア新書		
東京が燃えた日	早乙女勝元	
1945年8月6日	伊東 壮	
戦争と沖繩	池宮城秀意	
広島長崎修学旅行案内	松元 寛	
岩波ブックレット		
反核—私たちは読み訴える	核戦争の危機を訴える文学者の声明	
核戦争の曲り角	豊田利幸	
原子爆弾 広島長崎の写真と記録	仁科記念財団	光風社書店
写真集原爆をみつめる 1945年広島・長崎	飯島宗一、相原秀次編	岩波書店
生きているヒロシマ	土門 拳	筑地書店
原爆の図	丸木位里・俊	角川書店
原子核エネルギーの話 (東海科学選書) I. アシモフ		東海大学出版会
核時代と人間	坂田昌一編	雄渾社

絵でみる原子力のはなし	林喬雄、市村章	日刊工業
原爆の誕生	Clark, Ronald W.	みすず書房
放射線の恐ろしさ	J. Schubert & R. E. Lapp	岩波
核時代の哲学と倫理	John Somervitl	青木書店
国際シンポジウム原爆投下と科学者 (三省堂選書)		
	小川岩雄(等)	三省堂
核の大火と「人間」の声	大江健三郎	岩波
アトミックソルジャー	Howard Rosenberg	社会思想社
人間が危ない「核のはなし」	服部 学	水曜社
熱核戦争の脅威	Gopi Krishna	たま出版
反核のアメリカ	袖井林二郎	潮出版
第一次大戦—その戦略		原書房

原爆詩集	にんげんをかえせ	峠 三吉	合同出版
原爆の子		長田 新	岩波
広島島の詩人たち (新日本新書)	増田敏和	新日本出版	
ひめゆりの塔 (旺文社文庫)	石野経一郎	旺文社	
記録写真最終戦直後 (カッパブックス)	三根生久大		
			光文社

朝鮮人強制連行強制労働の記録			
	朝鮮人強制連行真相調査団		現代史出版会
日の丸は見ていた	桜本富雄		マルジュ出版
いくさ世(ゆう)を生きて	真尾悦子		筑摩書房
マリコ	柳田邦男		新潮社
悪魔の飽食	正・続 森村誠一		光文社
三 光 (カッパブックス)			中国帰還者連絡会編

ふたりのイーダ	松谷みよ子、え・司 修	講談社
死の国のバトン	松谷みよ子、え・司 修	偕成社
ランドセルをしょったじぞうさん		
	古世古和子、北島新平	新日本出版
絵本はだしのゲン	中沢啓治作・絵	汐文社
太陽の子	灰谷健次郎・田畑精一絵	理論社

〔編集後記〕

前号から、この14号が出る期間は、学校生活にとって一番油ののった灯火親しむの候であり、又、学校行事の活発な時期でもあります。

図書室でも上記の様に、読書週間を利用して、一人でも多くの学生諸君が図書室に足を運び、知的な好奇心を満し、これからの長い人生を豊かで、楽しいものであるようにと念願しています。

